

## 【論文】

# ルビからみる戦時中の日本語

遠藤 織 枝

## Phonetic Annotations on Japanese Words used during World War II

ENDO, Orië

**要旨**：戦時中の日本語の一面を、ルビによって捉えようとするものである。

戦時中の家庭雑誌『家の光』は1942年8月号までは、記事全体にルビが振られていた。そのルビで「日本」に「ニホン／ニッポン」のいずれのルビがふられているかをみると、1935年ごろまでは、すべて「ニホン」であったのが、戦局が激しさを増すと同時にほとんど「ニッポン」に替えられてしまっている。

また、「知識階級」のように、外来語が従来語・訳語のルビとして用いられる例が多い。そこから、外来語の定着の仕方をみるものである。つまり、外来語導入の過渡期的なものに、そのような外来語と漢字語の併記がされると考えられるので、当該の語句を当時の新聞・辞書、また戦後の新聞・辞書で使用の実情を調べた。その結果、外来語として、現在の新聞では「知識階級」はほとんど使われず外来語由来の「インテリ」が優勢になっている。一方で「空港」のように戦前の雑誌で併記されていた語の中には外来語でなく、「空港」が圧倒的になっているものがあることがわかった。導入された外来語の中にも、従来語・訳語の方が優勢になっていった語があることを示した。

**キーワード**：ルビ、戦時中日本語、ニホン／ニッポン、外来語、訳語

## はじめに

遠藤(2004)遠藤(2006)遠藤(2007)遠藤(2008)で、戦時中の日本語が現代の日本語にどのように流れ込んできているか、現代語は昭和初期の日本語とどのような関係にあるのか、戦争中に特有の語彙にどのようなものがあるのかなど、昭和の社会の日本語との関わりを考察してきた。本稿では、戦時中の雑誌の記事のルビから見える当時の日本語の実際と、現代日本語への影響や変化の過程をみようとするものである。

考察は、戦時中1931年1月号～1945年3月号までの家庭雑誌『家の光』（以下『家』と略記）のグラビアの記事を電子データ化して、それを検索しながら、語を抽出して、実態を調べていくという方法をとる。

雑誌のルビは、当時の雑誌が、漢字をどのように読むのを標準と考え、どのように読むのが好ましいと考えていたか、どのように読者に読ませようとしていたか、あるいは、読者にどのように読まれることを期待したかを伝えるものであり、また、当時の日本語の音韻面での期待や実際や標準を反映するものである。

その中で、I「日本」の漢字を「ニホン」と読むか「ニッポン」と読むか、

II 外来語と漢字と併記のもの、つまり、漢字のルビとして外来語（ある場合は外国語）が使われている語群を通して何がわかるか、

の2点に絞って考察をしていく。

### I 「ニホン」か「ニッポン」か

ここでは『家』で使われている「日本」の語に、「ニホン」とルビが振られているか、「ニッポン」のルビが振られているかを考察し、それらと当時や現在の辞書との関わり、また戦後の「日本」の発音の趨勢も概観する。

## I-1 『家の光』の「ニホン・ニッポン」

一連の戦時中の用語の調査では、『家』の戦時中15年のグラビアの全記事の用語を対象としているが、本稿では「日本」のルビに限定しているため、『家』の創刊号までさかのぼって、範囲を広げている。

当雑誌のグラビアは、1925年5月号創刊当初から総ルビで<sup>1</sup>、漢数字以外の漢字のすべてにルビが振られていた。それが、物資が逼迫して用紙が制限され、ページ数が減ってくる1942年後半から、総ルビでなくなる。42年の9月号からは、難解と思われる語にだけ、ルビが振られ、平易な語や、難解でも最初にルビがつけられて2度目に使われる語にはルビがつかなくなる。そのため、「日本」にはルビがつかなくなるので、「ニホン」か「ニッポン」かはわからなくなる。もちろん、その直前の41年のころはほとんどすべてが「ニッポン」になっていたから、ルビなしでも、編集者は読者に「ニッポン」と読まれることを想定していたと思われる。

まず、「日本」と単独で用いられたものと、「日本〇〇」、「〇〇日本」のように、複合して用いられたものに分けて表にまとめる。〔表1〕は、単独に用いられた「日本」のルビの振られ方、〔表2〕は、複合語のルビの振られ方を示している。1942年9月以降のルビが振られなくなって以降のものは「ルビなし」の項に入れている。

1 創刊の年1925年9月号だけはルビが振られていない。

〔表1 単独用法の「日本」の読み方〕

	1925-30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	1940	41	42	43	44	45	計
ニホン	22	11	12	9	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	62
ニッポン	0	1	5	0	6	4	7	7	15	7	23	13	5	0	0	0	93
ルビなし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	7	2	13

「日本」は、1925年の創刊から30年までは一貫して「ニホン」と読まれている。「ニッポン」は31年にはじめて登場し、34年にかけて徐々に増えていき、35年に「ニホン」と逆転し、それ以降は「ニッポン」一色になる。

この変化の時期は戦争が激化する時期とも重なっている。戦争が激しくなると、「ニホン」が否定され、「ニッポン」がよしとされるのは、促音を伴う「ニッポン」の方が音の響きが強いためだと考えられるが、このように、一斉に変化するという背景には、当時のNHKの放送での変化や、政治的な動きも存在したのかもしれない。この点についてはさらに調査が必要である。

次に、「日本」を構成要素とする複合語で、「ニホン・ニッポン」の両方の読み方で出現する語の変化するさまをみる。

〔表2 「日本」を構成要素とする複合語の「日本」のルビ〕

	1925-30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	1940	41	42	43	44	45	計
ニホン画			1	1				1									3
ニッポン画											1						1
ニホン一	2	3	3	6	2												16
ニッポン一					6	2	6	4	4	2	3						27
ニホン人	1		1		1												3
ニッポ人							2	2			2	2					8
ニホン精神					1												1
ニッポン精神								2	4								6

複合語においても、単独語の場合と全く同じ傾向が見られる。「日本画」は、37年までは「ニホン画」であったのが、1940年になると、「ニッポン画」になっている。37年の「ニホン画」の1例は、他の語が多く34-35年に「ニッポン」に替わっていった中で、すぐには「ニッポン」に同化できなかった例であろう。つまり従来の慣用の「ニホン画」の発音がそれだけ強かったといえる。

「日本一」は1925年から1934年までの14例はすべて「ニホン一」であった。それが、1934年から「ニッポン一」が交じりはじめて、この年の「ニホン一」の2例を最後に、40年までの27例はすべて「ニッポン一」に統一される。

「日本人」は、1925年から34年までに3例の「ニホン人」が見られるが、

36年の例以降はすべて「ニッポン人」になる。

そのほかの語としては「ニホン」のルビのものでは、

日本アルプス・日本映画・日本襟・日本音楽・日本海軍・日本髪・日本記録・日本銀行・日本軍・日本劇・日本国民高等学校・日本最初・日本最北・日本式・日本人・日本新八景・日本女子高等学校日本青年館・日本的日本独特・日本橋（東京の）・日本飛行家・日本婦人

がある。いずれも、1931年から1933年にかけて出現している。この中で「日本襟」だけは、1941年になっても「ニホン襟」を使い続けている。「襟」のやわらかい音と固く強い「ニッポン」の音とはマッチしにくかったのであろう。

「ニッポン」のルビの語では、

日本外交・日本館・日本軍・日本軍人・日本語・日本国内・日本国中・日本財界・日本座敷・日本三景・日本趣味・日本少年・日本女性・日本全国・日本選手・日本男児・日本武士道

がある。いずれも、1935年以降に使われている。

## I - 2 辞書の記述

これら「日本」のつく複合語の読み方について、当時と現在の代表的な辞書の記述を調べてみる。

戦争末期に刊行された『明解国語辞典』（金田一京助編 1943 三省堂 1997 復刻版 以下『明解』と略記）と、それ以前に刊行された『大日本国語辞典』（1915年 初版 1940年 修訂版 富山房 以下『大日本』と略記）と、現行の『広辞苑 6版』（新村出編 2008 岩波書店 以下『広辞苑』）の3冊である。

『明解』では、

「ニホン」の項目では以下の9語、

日本画・日本海流・日本髪・日本三景・日本紙・日本酒・日本主義・日本風・日本服、

「ニッポン」の項目では以下の10語、

日本アルプス・日本一・日本キリスト教会・日本組合教会・日本国・  
日本聖公会・日本精神・日本刀・日本晴れ・日本薬局方、  
が掲載され、後者が1語多い。戦争末期に作られた辞書ではあるが、「ニホン髪・ニホン三景・ニホン主義」などは「ニホン」を踏襲している。一方で「刀・精神・国」など当時の国威を高める語では「ニッポン」と結合させている。なお、「日本主義」は19世紀末に井上哲治郎・高山樗牛らが提唱した考え方で、今次の戦争以前から存在した固有名詞である。

『大日本』では、以下のようになっている。

「ニホン」の項目では以下の29語、

日本頭（あたま）・日本一（「ニッポン一」に同じ）・日本出立（いでたち）・日本犬（いぬ）・日本海流・日本形（がた）・日本形船（がたせん）・日本形（がた）船舶・日本銀行・日本語・日本国総追捕使・日本祭文・日本紙・日本酒・日本船舶・日本刀・日本魂（だましひ）・日本米（まい）・日本目（め）・日本物（もの）・日本力（りき）（「日本興業銀行」など組織名の語8語は省略する）

「ニッポン」の項目では以下の11語、

日本一・日本形（「ニホン形」に同じ）・日本形船舶（「ニホン形船舶」に同じ）・日本銀行（「ニホン銀行」に同じ）・日本熊・日本猿・日本人・日本刀（「ニホン刀」に同じ）・日本晴（ばれ）・日本米（「ニホン米」に同じ）・日本絵師（「やまと絵師」に同じ）、  
が掲載され、「ニホン〇〇」が、「ニッポン〇〇」の約3倍である。このうち、両方に出ているもので、「ニホン〇〇」で「（「ニッポン〇〇」に同じ）」というのが1語、「ニッポン〇〇」で「（「ニホン〇〇」に同じ）」というのが5語、「（「やまと〇〇」に同じ）」というのが1語で、それらを除くと「ニッポン〇〇」はさらに減る。「ニホン〇〇」を基準とするのが28語、「ニッポン〇〇」を基準とするのが5語ということになる。『大日本』では、「ニホン〇〇」が「ニホン〇〇」の5.6倍ということになる。

『広辞苑』では、

「ニホン」の項目では以下の166語、

日本アルプス・日本泳法・日本狼・日本音楽・日本画・日本海・日本海側気候・日本海溝・日本海低気圧・日本海流・日本カボチャ・日本髪・日本犬（けん）・日本語・日本国憲法・日本猿・日本ザリガニ・日本三景・日本紙・日本鹿・日本時間・日本酒・日本主義・日本食・日本人・日本茶・日本的経営・日本刀・日本橋・日本晴れ・日本服・日本舞踊・日本間・日本米・日本薬局方（「日本医科大学」「日本書記」など組織名・書名の131語は省略する）

「ニッポン」の項目では以下の4語、

日本一・日本永代蔵・日本橋・日本晴れ（→ニホンばれ）

が掲載され、『大日本』の「ニホン・ニッポン」の比率よりもさらに「ニホン〇〇」の占める比率が高くなる。『広辞苑』では「ニホン〇〇」が「ニッポン〇〇」の44倍である。

これらの辞書の「日本」を前要素とする複合語群と、『家』で使用される語群を比較するために、『家』と辞書、また辞書と辞書との間で互いに共通して採録している語だけを取り上げて一覧表にする。〔表3〕

〔表3 『家の光』と辞書のニホン・ニッポン〕

	家		明解	大日本		広辞苑	
日本アルプス	ニホンアルプス			ニッポンアルプス		ニホンアルプス	
日本一	ニホニー	ニッポニー		ニッポニー	ニホニー(1)	ニッポニー	ニッポニー
日本襟	ニホン襟						
日本音楽	ニホン音楽					ニホン音楽	
日本画	ニホン画	ニッポン画	ニホン画			ニホン画	
日本外交		ニッポン外交					
日本髪	ニホン髪		ニホン髪			ニホン髪	
日本記録	ニホン記録						
日本銀行	ニホン銀行				ニホン銀行	ニッポン銀行(2)	ニホン銀行
日本軍		ニッポン軍					
日本語		ニッポン語		ニホン語		ニホン語	
日本国		ニッポン国	ニッポン国			ニホン国	
日本猿					ニッポン猿	ニホン猿	
日本三景		ニッポン三景	ニホン三景			ニホン三景	
日本紙			ニホン紙	ニホン紙		ニホン紙	
日本酒			ニホン酒	ニホン酒		ニホン酒	
日本主義			ニホン主義			ニホン主義	
日本人	ニホン人	ニッポン人			ニッポン人	ニホン人	
日本精神	ニホン精神	ニッポン精神	ニッポン精神				
日本刀	ニホン刀	ニッポン刀	ニッポン刀	ニホン刀	ニッポン刀(3)	ニホン刀	
日本橋	ニホン橋					ニホン橋	ニッポン橋
日本晴れ			ニッポン晴れ			ニホン晴れ	ニッポン晴れ(4)
日本服			ニホン服			ニホン服	
日本米				ニホン米	ニッポン米(5)	ニホン米	
日本薬局方			ニッポン薬局方			ニホン薬局方	

(1)「ニッポニー」に同じ (2)「ニホン銀行」に同じ (3)「ニホン刀」に同じ (4)→ニホン晴れ  
 (5)「ニホン米」に同じ

この調査の結果を求めると以下ようになる。

1. 「日本一」は他の辞書が「ニッポニー」を基準としているにもかかわらず、『家』では30年まで「ニホニー」を使っていた。
2. 35年以降になると、『家』は、他辞書が「ニホン」を使っている「日本語」「日本画」「日本三景」もいっせいに「ニッポン」に替えた。
3. 『家』のニホン画→ニッポン画、ニホン刀→ニッポン刀、ニホン精神→ニッポン精神などへの変化を見ると、1935年以降に出てくる、ニッポン外交、ニッポン三景、ニッポン語・ニッポン軍なども、31年以前に使用例があれば、「ニホン〇〇」だったと思われる。
4. 戦後の辞書では「ニホン」が圧倒的に多いことから、戦時中「ニッポン」と読まれていた語の多くは、戦後は戦争が激化する前の「ニホン」に戻ったと考えられる。



5. 『家』で使われる「ニッポン〇〇」の多くは、戦時中だけの特殊な用法と言えよう。

次に「日本」の前に「全・大・新・純」の接辞がつく派生語を見る。どの語も43年以降は出現していないので、43年までの表とする。

〔表4 接頭辞のつく語〕

	1931	32	33	34	35	36	37	38	39	1940	41	42	43	計
全ニホン		2		2										
全ニッポン				3				1			2			
大ニホン		2												
大ニッポン							2	1				1		
新ニッポン								2		2				
純ニッポン						1	1							

「全日本」は32年34年には「全ニホン」がみられるが、34年と、38年には、「全ニッポン」になる。また、32年には「大ニホン」であったのが、37年には「大ニッポン」2例、38年42年の例では「大ニッポン」となっている。

「新日本」「純日本」は「ニッポン」の例しかない。

次に「〇〇日本」のように「日本」が後接する複合語の例をみる。この種の複合語はすべて「〇〇ニッポン」とルビがふられたもので、「〇〇ニホン」とルビの振られる語はない。

以下、複合語の例と例数を示す。( ) は出現年

海運ニッポン	1例	(40年)	海国ニッポン	1	(40)
革新ニッポン	1	(39)	軍国ニッポン	1	(37)
工業ニッポン	1	(38)	航空ニッポン	2	(38)
皇国ニッポン	2	(39)	銃後ニッポン	1 (38)・1	(40)
親邦ニッポン	1	(42)	正義ニッポン	1 (38)・1	(40)
青年ニッポン	1	(38)	戦時ニッポン	2 (40)・1	(42)

戦時下ニッポン	1 (39)・2 (40)	祖国ニッポン	1 (37)
非常時ニッポン	1 (37)・1 (39)	躍進ニッポン	2 (40)

これらの複合語はいずれも1937年以降のもの、すなわち、芦溝橋事件以後中国との戦争が全面戦争化し、激しくなって以降の語である。語の内容も「躍進・革新・戦時下・非常時」など勇気を鼓舞するような、積極的な意味をもつ語と「日本」を結合した語である。その勢いから言っても、「ニッポン」の力強さが求められる語であった。

戦争遂行のために力強いことばを求められ、穏やかな響きの「ニホン」が力強い響きの「ニッポン」に駆逐される結果となった。このことは、見方を変えれば、戦時下の国民はこのような力強いことばにさらされ、戦争協力への意思を固めていったと言えるのではなかろうか。

## I-2 戦後の「ニホン・ニッポン」

### I-2-1 『日本語話し言葉コーパス』の「日本」

大学での講義や講演の話し言葉を分析して、その中で「日本」が「ニホン」と発音されているか、「ニッポン」と発音されているかについて、前川(2004: 30)は以下のように報告している。2004年に公開された『日本語話し言葉コーパス』(国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学作成)を使って調べた結果、

「日本」と「日本」を含むすべての複合語(「日本人」「日本語」「北日本」「比較日本人論」など)を検索してみると8242件見つかりました。そのうち、ニッポンと発音されているのは196件、2パーセント強にすぎません。ニホンの圧勝なのです。<sup>2</sup>

この件数に基づいて数字を補足しておく、と、「ニッポン」が2.38%、「ニッポン」が97.62%となり、「ニホン」が確かに圧勝している。

2 引用文中の、漢数字はアラビア数字に替えている。

## I-2-2 NHKテレビニュースの「ニホン・ニッポン」

2008年夏北京オリンピック関連の放送で、いくつかの「日本」が放送された。7月末から8月はじめにかけて、観察した結果は以下のとおりである。

〔表5 NHKニュースのニホン・ニッポン〕

話者	ニホン	例数	ニッポン	例数
アナウンサーm 1			ニッポン選手	3
			ニッポン代表	3
			ニッポン時間	2
			ニッポン人	1
			ニッポン	6
アナウンサーm 2			ニッポン人	2
			ニッポン	10
アナウンサー f 1			ニッポン選手	2
アナウンサー f 2			ニッポン人	1
			ニッポン代表	1
アナウンサー 計				31
キャスターm	ニホン人	1	ニッポン選手	3
	ニホン史上	1	ニッポンの	1
	ニホン記録	1	ニッポン初	1
キャスター 計		3		5
スポーツ評論家m 1	ニホン人	2		
	ニホン	3		
スポーツ評論家m 2	ニホン	2		
スポーツ評論家 計		7		
結団式司会者m	ニホン選手団	1		
結団式司会者 計		1		
選手m 1	ニホン新	1		
選手 f 1	ニホン	1		
選手m 2	ニホン選手団	1		
選手 f 2	ニホン	1		
選手m 3	ニホン選手団	1		
選手m 3	ニホン	1		
選手 計		6		
経済記者m	ニホン	9		
経済記者 計		9		
気象予報士 f 1	ニホン海	1	ニッポン付近	1
気象予報士 f 2	ニホン海	1		
	西ニホン	1		
	東ニホン	1		
気象予報士 計		4		1
合計		30		37

m : 男性 f : 女性 m 1 は男性その1、f 2 は女性その2の意

この表で明らかなのは、NHKのアナウンサーは必ず「ニッポン」と発音し、キャスターは、「ニホン」と「ニッポン」を使い、また、NHKには属していないが、ニュースにいつも登場する気象予報士も「ニホン」・「ニッポン」を使う、NHK側の話者でも記者は「ニホン」を使う、それ以外の選手や評論家はほとんど「ニホン」と発音している、ということである。NHKの方針として当局のアナウンサーは、「日本」は「ニッポン」と発音するように決められているのであろう。気象予報士は毎晩NHKニュースに登場するため、NHK寄りになっている結果「ニッポン」も交じっている。それ以外の人は、つまり、NHKやその関連部門に属していない人は、みな「ニホン」と発音する。

このことは、前川（2004）の考察の結果とも一致する。見方を変えると、日本人の圧倒的多数が「ニホン」と発音している現実の中で、NHKがアナウンサーなどそこに属する人の発音を「ニッポン」に統一していること自体が、日本人の普通一般の言語使用の実態とずれているということになる。

オリンピックやサッカーの国際試合などで「ニッポン」が叫ばれることは多い。競技の勝利を願って応援し、強いことばで励ますには「ニホン」より「ニッポン」が適している。促音の入った語は語調を強め、士気を高める効果も強い。そのことは、戦勝を祈り、兵士を鼓舞し、戦意を高揚させる効果と共通している。したがって、戦時中の雑誌では、ふだん「ニホン〇〇」が慣用となっていた語まで「ニッポン」に替えられた。その戦争が終わって、再び平和な社会に戻って、戦中以前の日本人が使っていた発音である「ニホン」に回帰した。ところが、NHKだけが、アナウンサーには一律に「ニッポン」と発音させているというのは、時代への逆行であり、現実の日本語の趨勢に目をそむけているものと言わざるをえない。

## II ルビつき漢字外来語

遠藤（2007）では『家』の外来語を調査して報告している。そこでは、

外来語が敵性語とされることについて、実際に敵性語として使用が控えられていたかどうかを検証した。その結果、いわれるほど、外来語の使用は減ってはいないことがわかった。本稿では、雑誌記事のルビから外来語の消長をみようとするものである。

雑誌『家』の外来語の表記には、次の3つの型が見られる。

①片仮名表記のみ：例「モダンガール」

②漢字表記の語に意味の該当する外来語がルビとしてつけられる：例  
「速力」  
スピード

③中国語由来の外来語には、漢字に中国語音に基づく音のルビが振られる：例「太車」  
ターチョ

このうち①は外来語の表記として一般的なものであるのでここでは問題にしない。②③は漢字表記の語のルビとして外来語がつけられているが、この2者には、②は意味で対応するもの、つまり漢字は外来語の訳語に相当するもの、③は音で対応するもの、つまり漢字語の中国語音をルビとしたもの、という違いがある。このような扱いがされているということは、外来語の定着と関係があると思われる。外来語として認知されてしまっている語であれば、このような扱いでなく、①のように表記されるはずである。それをあえて②③のようにするのは、雑誌作成者側が外来語を使いたい反面、読者に伝わらないのではないかという危惧を抱いていることを表している。また、一過性の外来語使用の例と見ることもできる。ここに、当時の外来語の位置づけや使用者の意識、徐々に定着していき、あるいは消えていくプロセスをみることができる。

本稿では②③に該当する語群を、「漢字語・外来語併記語」と名づけ、一略して「漢・外併記語」「併記語」と呼ぶ—その42語について考察する。片仮名表記には長音符号の有無など複数の型が現れるが、『家』を基準としてそれに合わせる。

## II-1 『家の光』の漢字語・外来語併記語

『家』に出現する漢字語・外来語併記語には以下の29語がある。その出現数とともに〔表6〕に示す。なお、同じ外来語が、片仮名表記のみで使用される例もあるのでそれらを、片仮名表記外来語として、右の欄に示す。

〔表6 『家の光』の漢字語・外来語併記語〕

外来語	併記語	例数	片仮名表記外来語	
インテリ	知識階級	1	インテリ	1
エア・ボート	空港 空の港	3	エア・ボート	1
カーニバル	謝肉祭	2		
カルテ	病歴書	1		
カルチヴェーター	耕耘機	2		
クエスションマーク	疑問符	1		
コーチ	練習	1		
サウンド・トラック	録音帯	1		
ジャイロスコープ	環動輪	1		
ジャングル	密林・叢林	4	ジャングル	3
シヨウウインドウ	飾り窓	1		
シンボル	象徴	2	シンボル	2
スピード	速力王	1	スピード	8
ダンピング	投売	1		
チンパンジー	人類猿	1		
チーズ	乾酪	1		
テストパイロット	試験飛行士	1		
デツキ	甲板	1		
ハズ	夫	1		
バター	牛酪	1		
パパイヤ	木瓜	1		
ブレイントラスト	智囊委員	1		
ハリコブター	竹蜻蛉	1		
ボーリング	鑿穴	1		
マニキュア	爪掃除	1		
ヨツト	快走艇	1	ヨツト	3
ラツプタイム	途中計時	1		
ロボツト	機械人間	3	ロボツト	2
ワイフ	妻	1		

「ジヤングル」「エアポート」など、複数の漢字表記の語と併用されるものもある。また、「ヘリコプター」を「竹蜻蛉」、「マニキュア」を「美爪術」など、現代から見たら滑稽な訳語をつけた併記語になっているものもある。

ここで示される各漢字語は、それぞれの外来語の訳語に相当するもの、あるいは、外来語導入以前から存在した同義語である。(以下、これら訳語と外来語導入以前から存在した同義語をまとめて、「訳語」とする)。「ラップタイム」「マニキュア」など、新しい外来語が導入されたときは、その意味が一般に理解されにくいと考えられて、このようなルビの形による訳語が併記されたものであろう。その一方で、「インテリ」「スピード」「ロボット」などは、片仮名表記だけで使われている場合もある。

併記語は、定着するかしないかの境界線上にある語群だと考えられる。そこで、次に当時の辞書にこれらの語が採録されているか否かを調べてみる。

## II-1-2 辞書の状況

これら外来語の、当時出版されていた各種辞書における採録状況を見ることにする。年代の古い順から『最新百科社会辞典』(改造社1932、以下『最新』と略記)・『モダン百科事典』(日本辞書出版社1937、以下『モダン』と略記)・『新聞語辞典』(栗田書店1940、以下『新聞語』と略記)・『新聞雑誌語事典』(八光社1941、以下『雑誌語』と略記)・『外来語辞典』(富山房1941)・『明解国語辞典』(三省堂1943、以下『明解』と略記)の6辞書を参照して一覧表にして示す。外来語の表記は、『家』のものを見出し語として示しているが、辞書間にはそれと異なる表記がされる場合がある。それらも同語のものは、表記の違いを無視して同じ語としてまとめる。

〔表7 辞書の採録状況〕

	『最新』	『モダン』	『新聞語』	『雑誌語』	『外来語』	『明解』
インテリ	○	○	○	○	○	○
エアポート	○	○	○	×	○	△追い込み
カーニバル	○	○	×	×	○	○
カルテ	×	×	×	×	○	×
カルチヴェーター	×	×	×	×	×	×
クエスションマーク	×	×	△用例で	×	○	△追い込み
コーチ	○	○	○	×	○	○
サウンド・トラック	○	○	○	○	×	×
ジヤイロスコープ	×	×	○	×	○	○
ジャングル	○	○	○	○	○	×
ショウウインドウ	○	○	×	×	○	△追い込み
シンボル	○	○	○	○	○	○
スピード	○	○	○	○	○	○
ダンピング	○	○	○	○	○	○
チンパンジー	○	○	○	○	○	○
チーズ	○	○	○	×	○	○
テストパイロット	×	×	×	×	×	×
デツキ	○	×	○	×	○	×
ハズ	○	○	○	×	○	○
バター	○	○	×	×	○	○
パパイヤ	○	○	×	×	○	×
ブレイントラスト	×	×	○	○	○	○
ヘリコプター	×	×	○	×	○	×
ボーリング	○	○	×	×	○	○
マニキュア	○	○	○	○	○	○
ヨツト	○	○	○	○	○	○
ラツプタイム	○	○	○	×	○	△用例で
ロボット	○	○	○	×	○	○
ワイフ	○	○	×	×	○	○



6辞書全部が採録している語は、「インテリ・シンボル・スピード・ダンピング・チンパンジー・マニキュア・ヨツト」の7語、5辞書が採録しているのは、「エアポート・コーチ・ジヤングル・チーズ・ハズ・ラツプタイム・ロボット」の7語である。これらが認知度が高かった語と言えよう。どの辞書にも採録されていないのは、「カルチヴェーター・テストパイロット」の2語。1辞書に採録の語は、「カルテ」、2辞書に載せられているのは「ヘリコプター」で、これらは当時においては認知度が低かった、すなわちあまり定着していなかった語と言える。

### II-1-3 新聞での使われ方

これら定着途上にあった外来語が、当時の新聞でどのような使用状況であったのか、また現在の新聞で、戦時中には定着していなかった語がその後定着したのか、していないかを調べてみた。当時の新聞と現在の新聞紙上でこれらの外来語の使用数を検索し、各外来語と対応する訳語の使用数とを比較する。それによって、定着途上にあった外来語の定着の様子がわかると考えるからである。

新聞は、当時のものとしては『昭和の讀賣新聞 for DVD』（以下『讀賣』と略記）を参照し、その中の1937年1月1日～1945年8月15日の期間で各語を検索する。現在のものでは『毎日新聞CD-ROM2006』（以下『毎日』と略記）によって2006年1月1日～12月31日の期間で調べた。以下の〔表7〕で外来語というのは、『家』に漢字語のルビとしてつけられていた語である。なお、「ボーリング」に対する「試掘」のように『家』とは違う訳語の例もあるので、その種の語がある場合は、それらも検索した。片仮名表記や、長音符号の有無などで『家』とは異なるものもあるが、同語であることが明らかかなものは、同じ語としてまとめ、『家』の表記にそろえて記す。

〔表 8 外来語の新聞での使われ方〕

戦時中の『読賣新聞』1937年1月1日～1945年8月15日					現在の『毎日新聞』2005年1月1日～12月31日				
外来語	例数	訳語	例数	備考	外来語	例数	訳語	例数	備考
インテリ	61	知識階級	57	「知識人」12	インテリ	21	知識階級	1	「知識人」74
エアポート	1	空港	145		エアポート	5	空港	747	
カーニバル	10	謝肉祭	2	「シヤラツサイ 「謝肉祭」	カーニバル	44	謝肉祭	14	「謝肉祭(カーニバル)」3・「カーニバル(謝肉祭)」2
カルテ	0	病歴書	0		カルテ	150	病歴書	0	診療記録0・診療簿0診療録1
カルチヴェーター	0	耕耘機	1		カルチヴェーター	0	耕耘機	0	「耕耘機」5
クエスションマーク	0	疑問符	4		クエスションマーク	9	疑問符	56	
コーチ	97	練習	**	「競技指導者」1	コーチ*	86	練習	0	
サウンドトラック	0	録音帯	0		サウンドトラック	6	録音帯	0	「サウンド・トラック」1
ジヤイロスコープ	1	環動輪	0		ジヤイロスコープ	1	環動輪	0	「輪転儀」も0
ジャングル	106	密林	176		ジャングル	45	密林	17	
シヨウウインドウ	7	飾り窓	10	「陳列窓」4	シヨウウインドウ	20	飾り窓	2	「陳列窓」0
シンボル	5	象徴	19		シンボル*	191	象徴	540	
スピード	321	速力王	12		スピード*	59	速力王	4	速度9
ダンピング	20	投売り***	15		ダンピング	38	投売り	10	不当廉売19(うち「ダンピング(不当廉売)」7
チンパンジー	20	人類猿	6		チンパンジー	50	人類猿	5	「人類猿」0
チーズ	61	乾酪	0	「明治」チーズなど	チーズ	123	乾酪	0	
テストパイロット	13	試験飛行士	5	映画名「テストパイロット」6例	テストパイロット	5	試験飛行士	0	
デツキ	11	甲板	22		デツキ	17	甲板	23	
ハズ	0	夫	554		ハズ*	0	夫	174	
バター	255	牛酪	0		バター	96	牛酪	0	
ババイヤ	3	蕃木樹	0		ババイヤ	1	蕃木樹	0	「ババイヤ」3 「木瓜(ほけ)」3
ブレイントラスト	1	智囊委員	0		ブレイントラスト	0	智囊委員	0	「ブレーン」47、 「頭脳集団」1
ヘリコプター	5	竹蜻蛉	0		ヘリコプター	229	竹蜻蛉	0	
ボーリング	4	鑿穴	0		ボーリング	10	鑿穴	0	「試掘」16
マニキュア	4	爪掃除	0	「美甲術」0	マニキュア	10	爪掃除	0	「美甲術」0、 「爪磨き」0
ヨツト	314	快走艇	1		ヨツト	38	快走艇	0	「快走船」0
ラップタイム	2	途中計時	0		ラップタイム	5	途中計時	0	
ロボット	14	人造人間	1	「機械人間」0	ロボット*	26	人造人間	1	「機械人間」1
ワイフ	0	妻	1092		ワイフ*	0	妻	338	

\* 出現数が多いため、2006年7月1日～31日までの1か月間の検索

\*\* 「コーチ」に該当する訳語が特定できないため、検索していない。

\*\*\* ここでの「投売り」は、「大安売り」の意で使われている。

この表をまとめると次のように言える。戦時中の『讀賣』では、

- Y1. 外来語が圧倒的に多く使われる語＝カーニバル・コーチ・スピード・チーズ・チンパンジー・テストパイロット・バター・ヨツト・ロボツト 9語
- Y2. 外来語の使用も少なく、訳語の例がゼロの語＝ジヤイロスコープ・パパイヤ・ブレイントラスト・ヘリコプター・ボーリング・マニキュア・ラツプタイム 7語
- Y3. 外来語の使用と訳語の使用に決定的な差がない語＝インテリ・ダンピング 2語
- Y4. 訳語の使用も少なく、外来語の例がゼロの語＝疑問符・耕耘機 2語
- Y5. 訳語が外来語よりやや多いもの＝甲板・密林(叢林)・飾り窓 3語
- Y6. 訳語が外来語より圧倒的に多い語＝夫・妻・空港・象徴 4語
- Y7. 新聞に使用例がない語＝サウンドトラツク・カルテ 2語

一方、最近の『毎日』では

- M1. 外来語が圧倒的に多く使われる語＝カーニバル・カルテ・コーチ・サウンドトラツク・ジヤングル・シヨウウインドウ・スピード・チンパンジー・チーズ・バター・ヘリコプター・マニキュア・ヨツト・ロボツト 14語
- M2. 外来語の使用も少なく、訳語の例がゼロの語＝テストパイロット・パパイヤ・ジヤイロスコープ・ラツプタイム 4語
- M3. 外来語の使用と訳語の使用に決定的な差がないもの＝ダンピング・デツキ・ボーリング 3語
- M4. 訳語の使用も少なく、外来語の例がゼロの語＝耕運機 1語
- M5. 訳語が外来語よりやや多いもの＝知識人 1語
- M6. 訳語が外来語より圧倒的に多い語＝夫・妻・空港・疑問符・象徴 5語
- M7. 新聞に使用例がない語＝ブレイントラスト 1語。

Y1とM1は、外来語が訳語と比べて圧倒的に多く使われている語である。ということは、外来語が訳語より優勢で定着した語であることも示している。その中で『讀賣』と『毎日』に共通している語は、戦時中から定着していた語、『讀賣』になくて『毎日』にある語が外来語として戦後定着した語ということになる。それらは「カルテ・サウンドトラック・ジャングル・シヨウウインドウ・ヘリコプター・マニキュア」の6語である。M1に含まれる「カルテ」は『讀賣』では1例もなかったが、最近の新聞では多用されている。「病歴語」「診療記録」「診療簿」「病床録」など、訳語もいくつか辞書では見られるが、それらの使用例は「診療記録」1例以外になく、ドイツ語由来の「カルテ」が席卷してしまっている。「サウンドトラック」は1930年代以降の映画技術の進展とともに生まれた語で、戦前の辞書でも、『外来語』『明解』に採用されていない語であった。今では映画の音声部門について語るときに欠かせない語になっている。

「ジャングル：密林」の関係は『讀賣』では訳語のほうが多かったのが、『毎日』では逆転して外来語使用が多くなっている。「シヨウウインドウ」は『讀賣』では「まとも飾窓破り 浅草の写真機店を襲う」(1937/03/13)のような記事もあるように、訳語のほうが多かったのが、『毎日』では逆転している。「ヘリコプター」は戦時中の辞書も2辞書しか載せていないほど認知度が低い語であったため、『讀賣』の使用例も少ないが、『毎日』では盛んに使用されており、その訳語や対応する語はどの辞書にも見られない。

なお、「テストパイロット」は『讀賣』で圧倒的に多かったが、『毎日』では例数が少なかったため、定着したとは言い切れないが、『讀賣』で圧倒的に多かったのは、映画の題名にこの語が使われていて、その宣伝の記事が多く載っていたという特殊な事情がある。

一方で、訳語のほうが多い語が外来語の定着を阻んだ語ということになる。Y6とM6では、「夫・妻・空港・象徴」が共通して、訳語が外来語を圧倒している。これらの語は、外来語の使用も一時期見られたが、定着しなかった語ということになる。「象徴：シンボル」はどちらも使われるが、量的

に「象徴」が圧倒している。「クエションマーク」は『讀賣』では使用例がなく、『毎日』でも9例検索されたが、「疑問符」の約6分の1にすぎない。

外来語の例数が5以上で対応する訳語の例が0か1のものを、仮に完全に定着した語とみると、それらは、「カルテ・コーチ・チーズ・バター・ヘリコプター・マニキュア・ヨツト・ロボット」の8語である。これは29語中の27.6%を占めることになる。主として、食料品名・交通手段名・化粧手段など、本来そのような事物が存在しないところへ、導入された事物であるから、外国語のまま導入され、訳語よりも先に外来語のまま普及したものであろう。

なお、「ブレイントラスト」の使用例は『讀賣』には、「内閣補強 プレン・トラスト」(1937/10/12)など、15の使用例があるが、『毎日』には全くない。『毎日』では、「プレントラスト」ではなく、省略短縮形の「プレーン」の形で使われ、2006年1年間で47例使われている。外来語が語形を変化させながら存続している例である。

戦時中に萌芽を見せていた外来語の70年後の状況を見てきた。外来語として生まれても定着しない語が今回調査対象とした29語の中に5語17.2%存在した。外来語の繁殖という面だけを見ていると、外来語は受容され増え続けるかに見えるが、70年間の経過の中で見てくると、外来語としては定着せずに訳語・従来語のほうが優勢になった語が2割近くあることがわかる。

## II-2 中国語由来の漢字つき外来語

ここで、検討するのは、漢字つきの外来語で、漢字が中国語を示し、ルビが中国語の音を示している以下の9語である。

「<sup>クエ</sup>姑娘」「<sup>クリ</sup>苦力」「<sup>コン</sup>公司」「<sup>ヂュ</sup>鋤頭」「<sup>タチ</sup>太車」「<sup>タラ</sup>大拉網」「<sup>タラ</sup>大綱」「<sup>マン</sup>漫々的」「<sup>リー</sup>鯉魚」  
の9語で、これらは中国語に由来し以下のように使われている。

## II-2-1 中国由来の外来語の使われ方

これら9語の『家』の中での用例を1例ずつ挙げる。( )は掲載された号の年月と掲載ページを示す。

「<sup>クレーヤン</sup>姑娘」

例1 <sup>クレーヤン</sup>姑娘は朗か。<sup>ほがら</sup> 樂しげに<sup>たの</sup>そぞろ<sup>ある</sup>歩く<sup>クレーヤン</sup> 姑娘たちの<sup>すがた</sup>姿<sup>み</sup>が見られる。  
<sup>じゆんけいちゆう</sup> 巡警中の<sup>クレーヤン</sup>姑娘<sup>じゆんけい</sup>巡警。(1939/9/p2-3)

「<sup>クリー</sup>苦力」

例2 [……] <sup>きかいてき</sup>機械的な<sup>しごと</sup>仕事にも<sup>あ</sup>倦く<sup>こと</sup>事を<sup>し</sup>知らない<sup>クリー</sup>苦力。(1932/6/p4)

「<sup>コンス</sup>公司」

例3 二人とも<sup>カントン</sup>広東の<sup>ぶつさん</sup>物産<sup>コンス</sup>公司の<sup>もはんてん</sup>模範店員で [……] (1940/9/p6)

「<sup>ヂェトウ</sup>鋤頭」

例4 <sup>ヂェトウ</sup>鋤頭を使つて、<sup>ヂェトウ</sup>馬鈴薯畑の<sup>ヂェトウ</sup>除草。(1942/9/p9)

「<sup>ターチヨ</sup>太車」

例5 二頭びきの<sup>ターチヨ</sup>太車が、その袋を拾ひながら<sup>ターチヨ</sup>トラクターの<sup>ターチヨ</sup>後を追つて  
いく。(1942/11/p8)

「<sup>ターラーワン</sup>大拉網」

例6 豊かに<sup>ターラーワン</sup>獲物を<sup>ターラーワン</sup>のんだ<sup>ターラーワン</sup>大拉網が、<sup>ターラーワン</sup>元気いつばいな<sup>ターラーワン</sup>漁夫の手で<sup>ターラーワン</sup>引き揚  
げられる。(1943/2/p8-9)

「<sup>ターワン</sup>大網」

例7 一組の<sup>ターワン</sup>大網を<sup>もとで</sup>元手として<sup>ターワン</sup>水産報国に<sup>ていしん</sup>挺身しつゝある [……]  
(1943/2/p8-9)

「<sup>マンマンデー</sup>漫々的」

例8 <sup>あひる</sup>家鴨の<sup>けうせい</sup>嬌声と<sup>マンマンデー</sup>漫々的な<sup>うし</sup>牛の<sup>なきごえ</sup>鳴声が、<sup>へいわ</sup>平和の<sup>シンボル</sup>象徴のやうに<sup>きこ</sup>聞えてく  
る。(1941/5/p7)

「<sup>リーユイ</sup>鯉魚」

例9 獲れた、獲れた。<sup>リーユイ</sup>みごとな<sup>リーユイ</sup>鯉魚と<sup>リーユイ</sup>ハナ鱒だ。(1943/2/p9)

これらの語で辞書に採録されているのは、以下の3語で、いずれも『明解』

に採録され、それぞれの訳語や意味が記されている。

クウ-ニャン[姑娘] (支那語) 娘。少女。

クウ-リイ [coolie=苦力] 人足。人夫。クリイ。

マンマン-デ[漫漫的] (支那語) ①ゆっくり。のろく。②だんだん。そのうちに。

この中の「苦力」については、『外来語』も採録していて、次のように記述している。

ク(一)リー[Hi kuli Tamil kuli C 苦力]<sup>3</sup>。インド人または支那人の労働者。人足。

3 凡例によれば、Hiはインドウスタニー語、Cは支那語の略とされる。

『外来語』の記述によると、「苦力」は中国語由来というだけではなくヒンズー・タミル語にも由来しているとのことで、他の8語とはやや性質を異にする語と言える。

## II-2-2 使われた時期と出現数

これらの語が雑誌に出現した年と出現例数は以下の通りである。

「姑娘」：39年・4例、41年・2例、計6例

「苦力」：32年・1例、40年・3例、41年・1例、43年・1例 計6例

「物産公司」：40年・1例

「鋤頭」：42年・44年 各1例

「太車」：42年・2例

「大拉網」：43年・3例

「大網」：43年・1例

「漫々的」：41年・1例

「鯉魚」：43年・1例

異なり語として9語、延べ語として23語の中国語由来の漢字語・外来語併記語が『家』に使われていたことになる。このうち、最も早い例は「苦力」の1932年、次は「姑娘」の1939年である。それ以外はすべて1940年以

降に使われている。例文から理解できるように、「鋤頭」「太車」は「満州」開拓に際して日常使われた農機具名であり、「大拉網」「大網」「鯉魚」は「満州」地区での漁業に関する用語である。

「漫々の」は、『明解』によると、「ゆっくり・のろく」の意の中国語であるが、例8のような使われ方をみると、形容動詞の連体修飾用法として日本文の中に収まっており、外国語としてではなく、外来語として使われていることがわかる。

このような中国語由来の外来語は、戦争で中国に派兵されていた兵隊の帰還が日常的な存在となり、従軍記者の記事が日常的になるにつれて導入され、日本文に挿入されて使用しているうちに、外来語としての使用にまで進んだものと考えられる。加茂（1944:24）は「姑娘」・「漫々の」などを「事変以来、支那から入って、広く人の口に乘せられたもの」の例として挙げている。

## II-2-3 新聞での使われ方

当時の新聞にどのように使われていたかを『讀賣』の1937年1月1日～1945年8月15日の期間で検索してみる。

<sup>クニニキシ</sup>「姑娘」 「<sup>クニニキシ</sup>パラソルを手にした姑娘や子供も混じった老若市民が……」  
(1938/12/13) など88例、

<sup>クリ</sup>「苦力」 「多数の苦力を使用して道路、橋梁の建設に着手」(1938/01/07)  
など21例

<sup>コンス</sup>「公司」 「東綿紡績公司を設立」(1937/06/27) など241例

<sup>ヂュトウ</sup>「鋤頭」 使用例ナシ

<sup>ターチョ</sup>「太車」 使用例ナシ

<sup>ターラフン</sup>「大拉網」 使用例ナシ

<sup>ターワン</sup>「大網」 使用例ナシ

<sup>マンマンデー</sup>「漫々の」 「ドイツ側から見たる戦局漫々の理由は……」(1939/11/23)  
など2例



「<sup>リーユイ</sup>鯉魚」 「<sup>スイリウリーユイ</sup>碎溜鯉魚」(「今晚の献立」欄)(193704/17)の1例

「姑娘」「苦力」「漫々の」は一般的にも使われたが、「鋤頭」など農業漁業関連の語は『家の光』という雑誌の特殊性から使用例が生まれたものであって、一般の新聞には使われにくい語である。そのため、「鋤頭」以下4語の使用例はなかった。

「公司」は会社の意の中国語であるが、日本が中国に進出し会社を設立する際に会社名の一部として多く使われた。「漫々の」も上例のほか坂井徳三の「漫々の随筆」と題する随筆の題名にも使われていた。「鯉魚」は中国料理を紹介する記事の中で料理名の一部に使われていた。中国料理を中国語式に呼んで紹介する記事が新聞に載る時代だったのである。料理名の「<sup>リーユイ</sup>鯉魚」以外に新聞で使われていた「<sup>クーニヤン</sup>姑娘」「<sup>クリー</sup>苦力」「<sup>コンス</sup>公司」「<sup>マンマンデー</sup>漫々の」の4語について、戦後の辞書と新聞はどう扱っているだろうか。戦後の辞書の扱いを小型辞典で最新のもので調べてみた。対象は、『岩波国語辞典』6版(『岩国』と略記、以下同様)、『三省堂現代新国語辞典』3版(『三現国』)、『三省堂国語辞典』6版(『三国』)、『集英社国語辞典』3版(『集英』)、『新選国語辞典』8版(『新選』)、『新明解国語辞典』6版(『新明解』)、『明鏡国語辞典』(『明鏡』)の7冊である。

〔表8 中国語由来の外来語の採録状況〕

	『岩国』	『三現国』	『三国』	『集英』	『新選』	『新明解』	『明鏡』
<sup>クーニヤン</sup> 姑娘	○	×	○	○	○	○	×
<sup>クリー</sup> 苦力	○	×	×	○	○	○	○
<sup>コンス</sup> 公司	×	×	×	○	○	○	×
<sup>マンマンデー</sup> 漫々の	○	○	○	×	○	×	×

最近の小型辞書が、多かれ少なかれ、この種の中国語由来の語を採録していることがわかる。戦時中盛んに使われた名残であろうか、「<sup>マンマンデー</sup>漫々の」が半

数以上4種類の辞書に採録されているのは意外であった。

しかし、これらの語の最近の『毎日』での使用例は、中国の会社名を報道する際の会社名に「・・有限公司」と書かれる「公司」の例が2006年1年間で58例検索された以外、他の3語についての使用例は全くなかった。辞書の採録状況と実際の使用状況との大きな差が感じられる。「公司」以外の3語については、日中戦争中の一時期に集中的に使われ、戦争が終わると全く使われなくなった一過性の外来語であることを示している。

## おわりに

以上、70年前の「日本」の読み方と、当時使われ始めた外来語の、現在までの動きをたどってみた。ここで明らかになったのは次の2点である、

- ①戦争の激化につれて「日本」の読み方が、「ニホン」から「ニッポン」へ劇的に変化していったこと、戦争の激化に合わせる形で強いことばの使用が増えるという点で戦争と日本語の関係は密接につながっていたこと。
- ②外来語の氾濫が憂慮されているが、外来語は使われ初めて、そのまま定着するものも多い一方で、いったん使われ始めても、その訳語や、該当する従来語のほうが優勢となって外来語は使われなくなる場合があること。

戦争と日本語の関係は漢字使用の問題、情報伝達法の問題など、まだまだ解明すべき点が多い。また外来語の定着については、どのような語が定着しやすく、どのような語が消えやすいか、その消長についての法則性があるのかないのか、など今後考察しなければならない課題は多く残っている。

## <引用参考文献>

- 遠藤織枝 (2004) 「戦時中の話しことばの概観—現代語と比較しながら」(遠藤他編『戦時中の話しことば ラジオドラマ台本から』ひつじ書房pp27-64)
- 遠藤織枝 (2006) 「戦時中の敬語—家庭雑誌『家の光』のグラビアから—」(『文学部

- 紀要』20-1号文教大学文学部pp1-23)
- 遠藤織枝(2007)「戦時中の外来語は敵性語だったかー戦時中の雑誌の用語調査から」  
(北京大学日本語文化系北京大学日本文化研究所編『日本語文化研究第7輯』  
pp24-69)
- 遠藤織枝(2008)「戦時中の日本語の実際ー形容詞・形容動詞・副詞」(『文学部紀要』  
22-1号文教大学文学部pp)
- 加茂正一(1994)『新語の考察』三省堂
- 桜井隆(2004)「戦時中の外来語使用」(遠藤他編『戦時中の話しことば ラジオド  
ラマ台本から』ひつじ書房 pp115-140)
- 前川喜久雄(2004)「ニホンかニッポンか」(『文化庁月報』平成16年8月号『No. 431』  
p30)

### <参照辞書>

- 荒川惣兵衛(1941)『外来語辞典』富山房
- 市川孝編(2007)『三省堂現代新国語辞典』3版 三省堂
- 上田万年・松井簡治共著(1940)『大日本国語辞典』修訂版 富山房
- 植原武徳(1941)『新聞雑誌語事典』八光社
- 改造社出版部編(1932)『最新百科社会辞典』改造社
- 北原保雄編(2002)『明鏡国語辞典』大修館書店
- 金田一京助編(1943)『明解国語辞典』三省堂 復刻版1997
- 見坊豪紀他『三省堂国語辞典』三省堂 初版(1960)2版(1974)3版(1982)
- 高梨敏一(1937)『モダン百科事典』日本辞書出版社
- 千葉亀雄編(1940)『新聞語辞典』栗田書店
- 西尾実他『岩波国語辞典』岩波書店 初版(1963)～6版(2000)
- 野村雅昭他編(2002)『新選国語辞典』8版 小学館
- 松村明編(2006)『大辞林』第3版 三省堂
- 森岡健二他(2000)『集英社国語辞典』2版 集英社
- 山田忠雄他(2005)『新明解国語辞典』6版 三省堂

### <検索新聞>

- 『昭和の読賣新聞forDVD』読賣新聞東京本社メディア戦略局データベース部作成  
2007]
- 『毎日新聞CD-ROM2006』日外アソシエーツ 2007